

かたもり
容保桜植樹式

大学広報課

2013年2月26日、今出川キャンパス彰栄館東にあるサンクタスコートにおいて容保桜の植樹式が行われ、京都府、福島県、大学の関係者が力を合わせてくわ入れをした。

容保桜とは、京都府庁本館の中庭にある、大島桜と山桜の特徴を併せ持つ珍しい桜。その地が江戸時代末期京都守護職を務めた会津藩の上屋敷跡であることから、その藩主、松平容保公の名前にちなんで校守の第16代佐野藤右衛門氏が「容保桜」と命名された。

この度の苗木は、樹齢約3年で約80cmに育った2本を、第16代佐野藤右衛門氏（植藤造園会長）のご厚意により寄贈していただいた。この木には、京都府・福島県・同志社の強い絆を象徴する桜になってほしいとの願いが込められている。



植樹式当日の様子

左から
大谷 實 学校法人同志社総長
田中準一 京都府商工労働観光部長
鈴木敏夫 福島県大阪事務所所長（役職は当時）
佐野晋一 株式会社植藤造園代表取締役社長
八田英二 同志社大学長（役職は当時）



2013年8月8日現在の少し成長した苗木

同志社東日本大震災
復興協力金贈呈式

法人部法人事務室

2013年7月20日、福島県郡山市ホテルハマツで開催された同志社大学キャンパスフェスタin福島（郡山）の開会にあたり、福島県への義援金の贈呈式が執り行われた。

同志社は、創立者新島襄の妻、八重のふるさと福島県に対して、今できる支援は何かと考えていたところ、復興を目指す被災地への強い支援メッセージを込めたNHK大河ドラマ「八重の桜」の放映が決定し、今出川キャンパスへの見学者が急増することが予想された。このような状況から、学生、教職員、校友はもとより、キャンパスを訪れる見学者の皆様にもご協力をいただき福島県に対する支援の一つの柱として復興協力金の募金事業を立ち上げた。2013年1月29日に第1回目の贈呈を行い、今回は第2回目として1千万円の贈呈を行った。

義援金贈呈式では、尾嶋史章大学副学長が復興協力金の経緯説明を行い、続けて、大谷實総長より目録を贈呈した。その後、村田文雄福島県副知事から、同志社への感謝の言葉と共に福島県と学校法人同志社が締結している「連携協力に関する包括協定」の紹介があり、「連携協力にも引き続き連携・協力を行いたい」と挨拶があった。

今後も、「連携協力に関する包括協定」に基づき人的、知的、学術的な交流を深めるとともに、福島県の復興に引き続き協力していきたい。



目録の贈呈



村田文雄福島県副知事のご挨拶

同志社女子大学 寮生の集い —寮生活を懐かしんで—

2013年7月7日今出川キャンパス

女子大学

女子大学では、2013年8月から始まった今出川キャンパス整備計画による建設工事にもない、「新心館」の建て替えを行います。「新心館」は、かつては寮として、学生の生活を支えた建物でした。そこで、「新心館」をはじめ、本学の寮で学生生活を過ごされた卒業生に寮生活を懐かしんでいただくことと、初めての企画として「同志社女子大学 寮生の集い」を開催しました。

栄光館を会場に、開会礼拝、開会式に続き行われた講演会「同志社女学校はボーディング・スクールとして始まった」最初の名前は「京都ホーム」では、歴代の懐かしい寮の写真をストックリオンに映しながら坂本清音女子大学名誉教授に講演いただきました。

午後からは、純正館デントンホールに会場を移し、寮ごとにテーブルを囲みながらのランチタイム、在学生による現在の寮の紹介、テーブル対抗同志社クイズのほか、卒業生からは、寮の思い出をお話しいただきました。また閉会式では、当日参加いただいた最年長と最年少の卒業生への記念品贈呈も行いました。

全国各地から約440人の卒業生が集い、久しぶりの再会を喜ぶとともに、学生時代を過ごしたキャンパスを懐かしむ姿が見られました。



開会礼拝の様子



坂本清音女子大学名誉教授講演

ドナルド・キーン氏に 同志社大学名誉学位を贈呈

大学広報課

2013年7月9日、クラーク・チャペルにおいて、ドナルド・キーン氏への名誉文化博士学位贈呈式が行われた。村田晃嗣学長から名誉学位記およびフードが贈呈された後、ドナルド・キーン氏の挨拶があった。

ドナルド・キーン氏は、多くの日本文学に関する研究書と翻訳書があり、そのご功績によって多数の褒賞を受けておられる。

日本文学と文化研究の第一人者として日本を愛してやまないキーン氏は、東日本大震災以後、大好きな日本人々とともにありたいとの思いから、2012年3月に日本国籍を取得された。

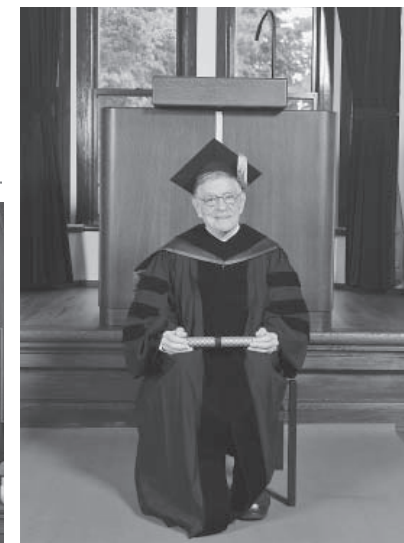
1953年から2年間、京都大学に留学した際には、第2次世界大戦中の戦友で親密な関係が続いていた、当時同志社アーモスト館長であったオーテス・ケリー氏の紹介により、東山区今熊野にある民家で暮らされた。その家屋は1979年に同志社へ寄贈・移築され、「無實主庵」という名称で賓客のもてなしや国際交流に利用されている。

また、キーン氏は1953年12月の同志社大学文学部英文文学科の卒業生予餞行事での講演をはじめとして、

その後も京都を訪れるたびにアーモスト館に宿泊され、文学部セミナーに協力されるとともに、

1993年の第17回新島講座での「日本文学における日誌の地位」という講演等において貴重な知見を披露され、本学学生が日本文学文化について理解を深めることに大きく寄与された。さらに2012年6月には、「日本、京都への思い」というテーマでの同志社アーモスト館開館80周年記念講演会・鼎談に出演された。

このようなキーン氏の日本文学・文化研究における顕著なご功績を顕彰するとともに本学へのご貢献に対する謝意を表するため、名誉文化博士学位が贈呈された。



ひまわりプロジェクト ～震災復興支援としての 中学生徒会の取り組み～

とのむらたたくや
中学校・高等学校教諭 外村拓也

2013年4月、本校生徒会の代表2人が昨年度集めた募金を宮城県宮古市の宮古第二中学校に届けました。以前から交流のある風間浦中学校生徒会が震災当時に宮古市の中学校に応援メッセージを贈った事を聞き、2012年3月に当時の新旧生徒会長が訪問したことが始まりとなっています。宮古第二中学校では、募金で購入した同志社関係の本を届け、残りの金額で購入する図書を検討して頂く約束をしてお別れしました。その後、南下し南三陸まで各地を訪問しました。宮古市では、防災課の方に巨大な防潮堤や震災時の状況を話して頂き、たろう観光ホテルでは襲ってきた津波の映像を、4階にある撮影した部屋で見ました。陸前高田では、同志社OBである菓子店の木村屋さんを訪ね、全国から届いた応援メッセージ入りの鯉のぼりを設置するお手伝いをしました。気仙沼では、復興支援の取り組みをされているホテル望洋に泊まり、避難所として使われていた当時の様子などを社長さんから聞きました。また、自ら復興に取り組んでいる高校生の団体にも会いに行きました。南三陸で

は、高校生の語り部の方に当時のお話を聞きました。訪問後の生徒会の2人は、自分たちができる事は何だろうと動き始め「地震や津波の恐ろしさを実際に経験していない僕たちができることというのは限られています。しかし東北のことを忘れない、これなら誰だつて出来るのではないのでしょうか。過去のことを振り返って未来につなげていく、これが僕たちに託された役目なのです。」(同志社中学校生徒会長西川要君の言葉より)と礼拝で訴えかけ、復興支援プロジェクトチームを発足し、生徒会執行委員のみの活動にとらわれず多くの生徒と復興支援への取り組みを考えています。具体的には、多くの生徒に被災地の現状を見て知ってもらおうために「東北ツアー」を企画したり、被災地の商品を学園祭で販売したり、デパートに置いて貰えるように交渉に行くなどを考えているようです。プロジ



宮古第二中学校生徒会長と。本を寄贈



陸前高田でガイドさんに説明を受ける



宮古田老地区の防災課の方に説明を聞く



木村屋さんで鯉のぼり設置

エクトの名前は、メンバーの一人である高橋花音さんが気仙沼に訪れた際に何もないとこころにとでもきれいなひまわりが咲いていたことから、このプロジェクトもこのひまわりのような存在になれたらという思いが込められているようです。今後も生徒自身による被災地復興への取り組みが続いてくれる事を期待しています。

第9回ACジャパンCM学生賞 「最優秀テーマ賞」受賞！

女子大学

女子大学学芸学部情報メディア学科3年次生の津上理奈さん、沢井優紀さん、潮恵里さん、山中綾乃さんの4名による、公共機関でのマナー向上をテーマとした映像作品「乗車試験」が、第9回ACジャパン(旧・公共広告機構)CM学生賞の最優秀テーマ賞に選ばれました。同コンテストでは全国のACジャパン正会員である大学等の学生を対象に公共問題をテーマとした30秒のテレビCMを募集。2012年10月よりエントリーを受け付け、集まった132点の作品の中から、選考の結果「乗車試験」は、グランプリ、準グランプリBSM放賞に次ぐ最優秀部門賞の最優秀テーマ賞に選ばれました。審査員からは、「公共機関乗車資格制度」というテーマ設定で、「公共機関でのマナー向上」を謳った作品。独特で新鮮な表現が、伝えたいメッセージをしっかりと印象付ける作品である。」という寸評をいただきました。



女子大ホームページの「同女チャンネル」
(http://www.dwc.doshisha.ac.jp/about/publicity/doujo_channel.html)「乗車試験 同志社女子大学」でご覧いただけます。

命の作品 骨格標本づくり

香里中学校・高等学校教諭 多田敏夫



ネコの骨格標本を生徒が観察している様子

中1と高2の理科で「脊椎動物の進化」を学ぶ際に観察する骨格標本を自家製作しています。過去にはイヌ、ネコ、タヌキ、カラス、ワニなどの遺骸を入手し、標本に仕上げました。

生徒達は授業を通して、魚類から両生類、爬虫類を経て哺乳類、鳥類へと遷り変わる過程で、「重力を克服する」という大きなテーマのもとに、骨が驚くほど機能的に進化してきたことを学びます。そして、学んだことを骨格観察実習で確認します。設問やスケッチ

が課せられたプリントを手に、実習室に並べられた十数体の骨格標本をウォークラリー形式で回りながら比較・観察します。国立科学博物館から借用した小型恐竜の実寸大骨格模型も目玉のひとつです。この単元を終える頃には、骨折した生徒が嬉しそうに負傷部位を専門用語で報告に来てくれるほど、ほとんどの骨の形や名称を覚えてくれます。私は毎年、新しい標本を製作してはここに追加し、ゆくゆくは自家製の博物館にするのが夢です。

この授業を通してもうひとつ伝えたいのは、命への感謝の気持ちです。これまでの標本製作には、事故等ですでに死んでいた動物を活用していました。ところが先日、知人の猟師がイノシシを譲ってくれるとのことで、受け取りに行ったところ、イノシシが生きたまま畷にかかっていました。今にもイノシシが射殺されそうなとき、標本製作のために命が奪われること



捕獲されたイノシシ

に、少なからず罪悪感を覚ええました。しかし、それ以上に、イノシシが倒れた瞬間、私達の生活が多くの命のおかげで成り立っていることを改めて実感しました。生徒たちにも命の標本に触れてもらいながら、この感謝の気持ちを伝えていければと思います。

このイノシシは筋肉や内臓を取り除いた後、現在は水に浸して細かな軟体部を腐敗させています。数か月後には骨だけが綺麗に残り、組み上げて完成となり、授業で大活躍してくれるでしょう。

全国高等学校アーチェリー 選抜大会優勝

やま だしんご
女子中学・高等学校教諭 山田慎吾

3月26日(火)〜28日(木)、静岡県掛川市つま恋で開催された全国高等学校アーチェリー選抜大会において、本校アーチェリークラブ2年生(現3年生)の伊藤佐保梨さんが優勝しました。

競技はシングルラウンドと呼ばれる形式で、女子は70m、60m、50m、30mの各距離からそれぞれ36射し、合計144射(1440点満点)の合計点数で順位を決定します。

伊藤さんは27日(水)の長距離で60mの大会新記録を樹立し、つづく28日(木)の短距離でも集中力を切らすことなくトップを独走し、トータル得点でも大会新記録となりました。

その後、5月に行われた世界ユース選手権大会代表選手選考会でも代表に選ばれ、念願であった世界大会への出場権を勝ち取ることができました。7月、8月の代表合宿を経て、目前に迫った10月の世界ユース選手権では優勝を目指しています。



アメリカンフットボール部 部員全員でつかみ取った 全国大会ベスト8!!

国際中学校・高等学校教諭 坂本智宏

2012年10月〜12月にかけて行われた第43回全国高等学校アメリカンフットボール選手権大会に本校アメリカンフットボール部は京都府代表として出場し、全国ベスト8という成績を残すことができました。

春に行われた関西大会京都府予選では、決勝で立命館宇治高校に7対14のタッチダウン1本差で敗れ、関西大会には出場できませんでした。敗れた直後から、自分たちは何が足りないのか、このタッチダウン1本差を埋めるためには一体何をすればいいのか、ということを生徒たちは自ら考え、夏季の練習に取り組みできました。その結果、秋季の全国大会京都府予選決勝では、立命館宇治高校に対して20対19で勝利し、京都府代表として全国大会への出場権を獲得しました。

まさに生徒たち自身が努力の積み重ねでつかみ取った結果です。全国大会では準々決勝で大阪府代

表の箕面自由学園高校に敗れてしまいました。生徒たちが得たものはとても大きかったと思っています。

本来の部活動とは、①生徒たちがスポーツ活動や文化的活動を通して、掲げた目標に向かって精一杯・全力で努力する力を養うこと、②チームメイト同士がお互いに信頼し合える人間関係を構築しようとする力を養うこと、③チーム(組織)としての規律を守る力を養うこと、④自分を周囲で支えてくれている大切な人々への感謝の気持ちを養うこと、などにその意義があると私は考えています。結果を出すことも大切なフアクターの一つではありますが、その結果がどうであれ、その結果に向かって精一杯努力するその「努力」こそが生徒たちの心を育てる・成長させると、私は確信しています。努力し、結果も残した生徒たちを、心より誇りに思います。



試合直後に選手・スタッフ全員で撮ったチーム写真。生徒全員がとても「いい顔」をしています。「やり遂げた表情」です。(同志社大学アメリカンフットボール場にて)

西日本私立小学校 教員研修会を開催して

小学校副校長 石川博三

2013年5月24日(金)、同志社小学校を会場校として、第55回西日本私立小学校教員研修会が実施された。参加者は1100人を超え、大盛況となった。研修会は、全校生徒と参加者全員で礼拝を守ることから始まった。

礼拝後は、同志社小学校全クラス・全教科による公開授業を実施した。公開授業実施にあたっては、研究推進部会が要となり「子どもたちが中心となって活動する授業づくり」という研究主題を決定し、各教科の部会が授業内容について具体的に研究を推進してきた。参加者からは、子ども達が生き生きと授業に取り組む姿や、積極的に意見交換する姿に高い評価を頂いていた。

公開授業の後には、同志社中学校・高等学校のグレイスチャペル・魁ホール(宿志館)をお借りしての全体会を開催し、奥野校長等による挨拶に続き、永年勤続者表彰や、研究主題に関する基調提案が行われた。

基調提案では、子ども達が授業に主体的に取り組むようにするために、どのように考え研究し取り組んできたか、また、日頃の様子

について具体的に発表した。次に同志社小学校ミニオーケストラやキッズクワイアの児童発表が行われた。目を輝かせながら、思いを込めて演奏や合唱する子ども達の姿に大きな拍手が湧き起こった。

全体会の最後には、同志社大学大学院加藤千洋教授より「歩いて見て感じた『平成ニッポン』」と題してご講演いただき、私たちが今、忘れてしまおうとしている、しかし忘れてはならない大切なものがあることを再認識させていただいた。

昼食後は、教科に分かれて部会を開催した。部会では本日公開した授業と基調提案について討議を行った。多方面からいろいろな意見を出されたことは、今後の教育活動にとって大きな財産となることであろう。

西日本私立小学校教員研修会という大きな大会を引き受け、研修会当日得たことも多か

つたが、加えて、教職員が力を合わせ、この研修会に向けて取り組むことが出来たことも大きな成果だったと思う。

最後に、同志社中学校・高等学校を始め、多くの関係する方々にご協力いただいたこと、心から感謝している。



公開授業



全体会



分科会